

# 「ビトレイヤー」

★★★★

2013（平成25）年5月19日鑑

賞<テアトル梅田>

監督・脚本：エラン・クリーヴィー

マックス・ルインスキー（捜査官）／ジェームズ・マカヴォイ

ジェイコブ・スターンウッド（大物犯罪者）／マーク・ストロング

サラ・ホークス（マックスの同僚の捜査官）／アンドレア・ライズブロー

ロイ・エドワーズ（ジェイコブの協力者）／ピーター・ミュラン

ディーン・ウォーンズ（元軍人）／ジョニー・ハリス

トーマス・ガイガー（呼称：トム）（マックスの上司、警視長）／デヴィッド・モリッシー

ネイサン・パートニック（マックスをライバル視する同僚）／ダニエル・メイズ

2013年・イギリス、アメリカ映画・99分

配給／ファインフィルムズ

## <テーマの分散が、少し残念・・・>

本作のパンフレットには映画評論家・森直人氏の「『二枚看板』のブリティッシュ・ノワール-マイケル・マン、トニー・スコットの魂を受け継ぐもの-」があり、「二枚看板」のクライム・アクションをテーマにしたさまざまな映画と対比した興味深いコラムがある。たしかにそれはそのとおりで、本作の冒頭、ガスマスクとスーツそしてバイクという奇妙な組み合わせで鮮やかな盗みの手口を見せる大物犯罪者ジェイコブ・スターンウッド（マーク・ストロング）と、これを一人で追っかけながら逆襲されて右足を撃たれてしまった捜査官マックス・ルインスキー（ジェームズ・マカヴォイ）の「対決」が本作のテーマになる。そんな「つかみ」のシーケンスを観れば誰もがそう思うはずだが、「それから3年後」に展開される復讐劇と並行するもう一つのテーマが、イギリスにおける銃規制のあり方だ。

アメリカと違って銃規制の厳しいイギリスでは、警察官でも日常的に銃を所持することは許されないため、あの時マックスは丸腰でジェイコブを追っかけざるをえなかったわけだ。しかし、そんなことでは警察は凶悪な犯罪者や犯罪組織と対峙できないから、「警察官に銃の所持を！」を旗印として政治活動を展開する国際的警備会社や政治家、それと結びついた警察上層部が存在することになる。アメリカでは銃規制の声がいくら高まっても、銃器製造・販売業者と結託した政治家がうじゃうじゃいるため銃規制が実現しないのと同じ（逆の？）構造だ。それはそれで興味深いテーマだが、本作ではこの2つのテーマが分散している（？）のが少し残念・・・。ちなみに、本作の邦題『ビトレイヤー』とは①裏切り者、売国奴、②内通者、密告者という意味。まさかマックスが「ビトレイヤー」ではないはずだから、これはジェイコブのこと？それとも全く別の第三者のこと・・・？

## <3年後の再会と2人の再対決は・・・？>

『裏切りのサーカス』（11年）（『シネマルーム28』114頁参照）、『ゼロ・ダーク・サーティ』（12年）等々で渋い演技を見せていたマーク・ストロングが、本作では大物犯罪者ジェイコブ役をあくまでクールに演じている。冒頭の大仕事でガッポリ稼いだ彼はその後アイスランドに潜伏して優雅な隠遁生活を送っていたが、ある日息子のルアンから危機を告げる電話が入ってきたため、再びロンドンに赴くことに。

他方、ジェイコブと正反対にあの日の出来事で身体だけではなく心にも大きな傷を負ってしまったマックスは、この3年間ほぼ生殺し状態に置かれていた。そんな状況下、「ジェイコブ現わる！」の情報を得た彼は再び現場での活動を目指したが、そこにはさまざまな壁が。その第1は、マックスの同僚で現在ジェイコブ捜査の指揮を執っているネイサン・パートニック捜査官（ダニエル・メイズ）がマックスを完全に無視ないし敵視していたこと。第2は、マックスの上司であるトーマス・ガイガー警視長（デヴィッド・モリッシー）や、警察官に銃の武装を求める政治活動を展開している影の内務大臣やその選挙事務長の女性たちの微妙な（？）動き。ひょっとして、彼らにとってはジェイコブのような大物犯罪者が暴れまわることによって一般市民や警察官に被害が出れば、「警察官に銃の所持を！」の声が高まるから好都合。そう考えているのでは・・・？トーマス警視長から「ジェイコブを追え」との命令を受けたマックスは喜んでそれに従ったが、ひょっとしてその命令には何かウラがあるのでは・・・。

それはともかく、ジェイコブのパカ息子がパカな動きをしたことによって、3年後に再びマックスとジェイコブが再会し、その対決が実現することになったが、さてその展開は・・・？

## <双方とも試練を迎える中、奇妙な友情が・・・>

本作中盤の展開では、国際的警備会社や政治家たちをバックにした「元軍人」という男ディーン・ウォーンズ（ジョニー・ハリス）が怪しそうな動きを見せる。また、心身共に傷つき自信喪失気味（？）のマックスを何かと励まし、マックスのパートナーとして活動するサラ・ホークス捜査官（アンドレア・ライズブロー）が、「紅一点」としての存在感を見せてくれる。そして、少しずつ捜査の網を狭めていった捜査官サラを埠頭のコンテナ集積所「PUNCH」で襲い、これを殺してしまうのがディーンとなる。ちなみに、本作の原題は『Welcome to the Punch』で、この「PUNCH」とはこのコンテナの集積所のこと。しかし、ここに置いてある大量のコンテナの中身は？

他方、ロンドンに一人戻ってきたジェイコブを何かと助ける協力者が、初老の男ロイ・エドワーズ（ピーター・ミュラン）だ。ジェイコブの目的は、まずは瀕死の重傷を負って病院に収容されている息子ルアンに会うこと。厳重な警戒を次々と突破していくジェイコブの知恵には感心させられるが、結局その協力をするようになったのはなぜかマックス。しかし、やっとの思いで面会できたにもかかわらず、息子は既に死んでいたので、再びそこからジェイコブとマックスの対決が？個人的な恨みつらみだけなら当然そうなるところだが、今や2人はルアンの死亡とサラの死亡という大きな試練を否応なく体験させられていた。そのうえ、その背後には巨大な陰謀が存在することがミエミエだから、2人が自分たちの真の敵は誰？と考えたのは当然だ。このように、双方とも試練を迎える中で奇妙な友情が生まれてきたが、中国でかつて「国共合作」を成功させ、共通の敵、日本帝国主義に立ち向かったように、共通の敵〇〇、△△に対するマックスとジェイコブの協力体制の構築はできるのだろうか・・・？

## <それにしても、マシンガンってこんなに当たらないの？>

私が直前に観た『エンド・オブ・ホワイトハウス』（13年）、『L. A. ギャングストーリー』（13年）、『欲望のバージニア（LAWLESS）』（12年）は、いずれもマシンガンをぶっ放す対決が大きな見どころになっている映画だったが、そこでの感想は「マシンガンって、こんなに当たらないの？」「不死身伝説をタップリと！」だった。本作では、マックスとジェイコブ、そしてロイの3人が元軍人のディーンから黒幕の存在を聞き出した後、原題とされている「PUNCH」に向かい、黒幕を呼び出したところで発生する銃撃戦がクライマックスになるが、さてその黒幕とは一体ダレ？さらに、ディーンとの対決で重傷を負ったロイを残してPUNCHに赴いたマックスとジェイコブの2人を襲ってきた「マシンガン部隊」とは一体ダレ？

本作は当初から「マックスとジェイコブの対決」がテーマとして設定されているが、それに集中していると「真の敵」がダレかわからなくなってしまう恐れがある。さらに、「警察官に銃の所持を！」の勢力が具体的にどんな画策をしているのか、を率直には見せてくれないから、中盤からクライマックスの銃撃戦に至るストーリーはわかりづらい。途中、ネイサンが某勢力とつるんでいることが判明した時はすぐに「なるほど」と理解できるが、まさかマックスの上司トーマスまでも・・・？

そんなこんな謎解きを含んだ中での銃撃戦だが、ここでも私の感想はマシンガンってこんなに当たらないの？というものだ。PUNCHに赴いたのはマックスとジェイコブの2人だけ。しかも、人質として連れていったディーンをちゃんと人質としてキープしておくのは難しいから、これがマシンガンを持った大量の襲撃部隊と呼応することになれば、かなりヤバイ。そう考えれば、さっさとディーンを殺しておくべきだが、さて2人は・・・。誰がどう考えても本作の2人の主役がこの銃撃戦で死亡することは考えられず、ラストはそれなりにカッコ良くスタイリッシュに収められている。しかし、あえてもう一度くり返せば、マシンガンってこんなに当たらないの・・・？

2013（平